

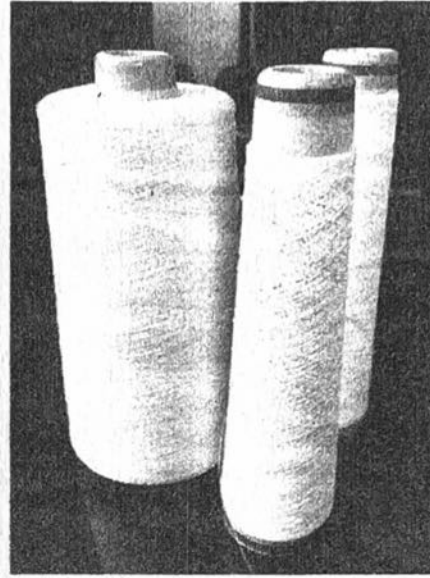
備後燃糸

企画から呼んで下さい!

和紙糸で自販比率6割に

燃糸業の備後燃糸(広島県福山市)は今期(2022年3月期)、和紙糸「備和」を中心とした自販が売上高の6割を超える見通しを示す。受託加工の減少があるものの、自販糸のニット製品への採用が前期よりも大幅に増加。「新製品開発の際は企画から呼んで下さい」と触れ込みながら営業活動を進めている(光成明浩社長)成果が始めている。

同社は09年に和紙事業部を立ち上げ、和紙を使った燃糸の自販を開始。ここ数年で販売が軌道に乗り始め、16年からは定番糸の備蓄販売も開始。現在は織物向けに和紙100%糸を11、18、30番手の3品番、ニット向けに和紙とポリエステル長



和紙糸の「備和」

繊維との交擦糸を20、27番手の2品番を備蓄する。

用途はTシャツや靴下などが多く、三備地区だけでなく大阪や和歌山からの引き合いが増加。20秋冬向けにはオフィスウェアでも採用され、「思っていた以上にリピートが多い(光成社長)」。

最近ではオリジナルの和紙糸を求めるニーズが増え、この半年間で例年よりかなり多い30、40パ

「細かい対応」が実を結んできた。

綿とキュプラ繊維「ベンベルグ」の交擦糸など独自素材の開発も強化。銅線糸は抗菌作用といっ

た機能性を持つ可能性があり、現在検査機関で検査中。将来的には手袋といった製品化まで目指す。

受託加工が減り、自販が売上高の6割まで増える見通しについて、光成社長は脱受託として「前向きに捉え、自販をもっと増やしていきたい」と話す。

ターンを試作した。ほとんどが本生産にもつながっているという。

「20、30番から気軽に試験ができる点が評価されているのでは」と分析。和紙とポリエステルやナイロンなどさまざまな糸と交擦することで「これまでにない風合いや味が出せる」。さらにニットターがすぐ編み立てできるように、丸編み機の給糸口の個数に合わせてコーンを供給するなど